

中国における宮沢賢治文学の受容
(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 : D186364

氏 名 : 母 丹

本論文は、1939～2020年という、およそ80年間にわたる中国における宮沢賢治文学翻訳受容の状況を考察したものである。また、理論としてはイーヴン＝ゾウハーのポリシステム理論と、ルフェーヴルのリライト理論を使用し、考察の重きを「翻訳作品の選定」と、「リライトに反映されるイデオロギーと詩学」に置いた。

論文はⅡ部から構成されており、第Ⅰ部は1939～1944年という戦時下の受容状況に着目した。戦時下の中国社会は、「半植民地社会」であり、大東亜主義をはじめとする日本側のイデオロギーが侵入してきた。文学作品の翻訳も無論イデオロギー侵入の一環であるが、賢治文学のような純文学作品の翻訳における〈侵入〉は、それほど顕在的なものではない。戦時下の宮沢賢治作品の翻訳を例として具体的に説明すれば、イデオロギー侵入を実際に推し進める日本側の権力者は侵入の意図により、作品の〈選定〉に関わることがあるが、具体的なリライトの作成に干渉することが少ない。こうした状況の下で、かえって「反日」を出発点とする翻訳が多く作成されたのである。第Ⅰ部の各章の詳細は下記の通りである。

第1章では、北京近代科学図書館の会報『書滲』の第4号（1939年2月）に掲載された銭稻孫の「一對譯一北國農謡」（「雨ニモマケズ」）を取り扱った。考察を通して、「雨ニモマケズ」を翻訳作品として〈選定〉したのは、出版社（北京近代科学図書館）側の山室三良だという結論をまず得た。ただし、出版社としての北京近代科学図書館は「対支文化事業」の1つとして成立したため、イデオロギー侵入の意図を持つと言える。したがって、「雨ニモマケズ」の〈選定〉の背後にも、そうした意図が隠されると考えられる。一方、銭稻孫によるリライト「北國農謡」には大きな書き換えがなされており、形式としては「雨ニモマケズ」という口語自由詩が謹厳な七言漢詩に改められ、主題においても変化が見られる。形式の変更は越境性を帯びる北京近代科学図書館の持つ中国と日本両国の読者群に由来し、主題の変更は訳者銭稻孫の持つ道家思想によるものだというのは第1章の結論である。

第2章は雑誌『華文大阪毎日』に掲載された白樺訳の宮沢賢治詩五章の関連背景として、白樺の属する団体——戦時下の在日「満州」文化人の学習グループと、彼らが『華文大阪毎日』で設けた翻訳文学特輯の詳細を考察したものである。グループの人たちは反抗（反日）精神という戦時下中国人民の普遍的なイデオロギーを持つと考えられ、そのイデオロギーは彼らが担当した翻訳文学特輯においても反映されている。第2章ではそれらの反抗精神を確認した。

第3章では白樺訳の宮沢賢治詩五章を具体的に分析した。まず〈選定〉から言えば、『華文大阪毎日』における翻訳文学特輯「日本現代詩選譯特輯」も第2章で述べた文化人によって設けられているため、その作品〈選定〉も当然彼らによって行われる。一方、リライトそのものには、訳者白樺のイデオロギーと詩学のみならず、彼自身の経歴と感情も強く反映されている。第3章ではその具体的な〈反映〉を確認した。

第4章では季春明訳の『風大哥』（『風の又三郎』）を取り扱った。この『風大哥』が作成

された場所は、植民地だった「満州」であり、日本側のイデオロギー侵入が最も強かったところである。しかし、『風の又三郎』を訳したのは、王恒仁という国民党の地下黨員であり、つまり中国側の反抗者である。王は当時スパイとして「満洲」協和会中央本部文化部に潜入しており、彼の言動から、『風の又三郎』の〈選定〉のゆえんを探ることが可能である。第4章では主にこの〈選定〉の背景を明らかにした。

第5章は日本の女性作家田村俊子が創刊した華字婦人雑誌『女聲』第2巻第8期（1943年12月）に掲載された陳緑妮訳の「定件繁多的館子」（「注文の多い料理店」）の〈選定〉を考察したものである。中国の土地に愛着を覚え、戦争を嫌悪する『女聲』の主宰者、田村俊子が「戦争や帝国主義への反感」という読みの可能性さえ含む「注文の多い料理店」を翻訳作品として〈選定〉した、というのが第5章の結論である。

一方、「定件繁多的館子」の翻訳者陳緑妮は中日混血児という特殊な身分を持つ人物であり、彼女がこの訳文に関わるようになった経緯、陳のリライトそのもの、及び人知れぬ陳の実像に関する考察は第6章で行った。

1945年に、戦争の終結にともない、日本側の権力者も中国から退いた。また、1949年の中華人民共和国成立後、中国共産党に統制される中国社会は一元的なものになり、イデオロギーと詩学も支配者としての中国共産党から大きな影響を受けるようになった。第II部で取り扱う翻訳（受容の沈黙期・復活期・全盛期の代表的なもの）は、こうした社会から生まれたものである。

第7章では1949～1978年という受容の沈黙期における唯一の訳本（翻訳絵本）、『小木偶拉大提琴』（「セロ弾きのゴーシュ」）を取り扱った。この時期では、翻訳作品の〈選定〉に際して、政府機関が決定的な権力を握っていた。『小木偶拉大提琴』も無論そうである。また、『小木偶拉大提琴』は、対象読者である低学年の子供に配慮し、同時に「進歩的」な価値観が求められる時代の要請にも合わせなければならないため、原作を書き換え、わかりやすさ・明るさ・積極性・教育性といった要素が備わる単純なセロ弾きの成長・成功物語として作り上げられたことが明らかになった。

第8章では、受容の復活期における2つの重要事項、1981年の王敏訳「花様翻新的飯店」（「注文の多い料理店」）と、1986年中国側の『日本文学』で企画された宮沢賢治特集を研究対象とした。「花様翻新的飯店」の掲載時期は、改革開放初期にあたり、文革時代に唱えられていた「熱や気迫のこもった」文学、または外国文学作品への「毒草」扱いといったものの影響は、まだ強く残されている。王敏は当時の詩学やイデオロギーに合わせるため、自分のリライトにおいて、非常に多くの〈操縦〉を施した。その詳細についてはルフェーヴルのリライト理論を用いて、細かく分析した。一方、「花様翻新的飯店」より5年後に出版された「宮沢賢治特集」に収録されたリライトには、〈操縦〉がほぼないが、宮沢賢治本人を紹介する文章には「批判の目線」が見られる。そうした「批判」の背後にはイデオロギー的な原因があると考えられ、その原因も第8章で探った。

第9章は図書出版の市場化が次第に成熟した2000～2020年における受容の全体的な状況を把握しようとしたものである。受容の詳細を翻訳出版・研究・アダプテーションにわけて整理したうえで、研究とアダプテーションにおいてなお見られるイデオロギー的影響を確認した。

1939～2020年にかけての、宮沢賢治文学作品の中国語訳の変遷から、中国社会のイデオロギーと詩学の変遷をとらえることもできる。戦時下の「半植民地社会」から生まれた各リライトには、侵入してきた日本側のイデオロギーの影響と、その侵入に対する中国人民の態度が見られる。全体から見て、その態度は「協力」（「北國農謠」）と「反抗」（宮沢賢治詩五章、『風大哥』、「定件繁多的館子」）に大別される。また、各リライトに反映される詩学は、翻訳者の理念・所属社会・言語能力、さらに予想される読者の違いによって、様々な形を呈している。ただし、いずれのリライトにおいても、中国語の文語が多少使われており、「民国」という時代の特徴を持っている。

一方、戦後の一元的社会としての中国において作られたリライトに見られるイデオロギーと詩学は、戦時下のそれに比べればより単純なものになっている。全体から見て、「進歩的」なもの、「明るい」ものを是とするイデオロギーはこの時期のリライトに共通して見られる特徴と言える。また、詩学における共通点は、新しい言葉を吸収しつつある現代中国語がリライトに使われていることであり、「現代」という時代特徴を語っていると言える。